

## 26. 肺癌術後化学療法の検討

－外来化学療法の有用性及び薬剤感受性試験の導入に関する報告－

外科学（胸部）

青木秀和, 石濱洋美, 荒木 修, 江連理佳, 田村元彦, 梅津英央, 池田康紀, 長井千輔, 三好新一郎

【目的】非小細胞性肺癌術後病期 IB 以上の症例に対する術後補助化学療法ドキタキセル (TXT)・ジェムシタピン (GEM) の外来投与を含む耐認性の評価

【対象】平成 13 年 3 月から平成 14 年 9 月までの手術症例 105 例中レジメンに沿って行った 23 例

【方法】非小細胞性肺癌 p-stage IB 以上の 23 例に TXT・GEM の術後化学療法を行い、4 コースを目標とした完遂率、中止、脱落理由を検討した。

【結果】4 コースの完遂率は 18 例中 12 例が完遂で 66%。現在進行中の 5 例を含めると 74%であった。脱落例は 6 例でその理由は副作用が 3 例、患者拒否が 1 例、治療変更が 1 例、その他 1 例であった。副作用に関しては、骨髄毒性と消化器症状がみられたが、入院・緊急処置を要することはなかった。

【結論】TXT・GEM による外来投与を含む術後補助化学療法の予定完遂率は 74%であり、副作用が脱落理由となったのは 3 例で耐認性はありと考えられた。

## 27. ラット周産期におけるビスフェノール A の低用量曝露は青斑核の性差を変える

生理学（生体情報）

渡辺るみ, 荒井興夫

目的：内分泌攪乱化学物質が脳の性分化に及ぼす影響について調べた。

対象・方法：Wister 系母ラットに妊娠 0 日より離乳時まで飲料水にビスフェノール A (BPA: 0.1, 1mg/L) を混ぜて、経口投与した。13 週齢の子ラットの脳を取り出し、青斑核の大きさを調べた。

結果：青斑核の大きさは対照群ではメスの方がオスよりも大きいという本来の性差が見られたが、BPA 曝露群ではオスの方がメスよりも大きく、性差が逆転した。本研究により、胎児期及び授乳期の BPA 曝露は、青斑核の性分化を障害することが明らかとなった。特に、0.1mg/L BPA 曝露群における母ラット当たりの投与量は約 30  $\mu$ g/kg/day とヒトの許容摂取量 (50  $\mu$ g/kg/day) 以下であり、BPA がヒトの行動や脳機能に影響を及ぼす可能性を示唆している。